

よみがえれ！  
有明訴訟弁護団  
(後藤富和)発行  
092-512-1636  
090-9602-0700

## 佐賀西部 重症

【西日本新聞 1月29日】

佐賀県 有明海養殖ノリ 色落ち被害拡大 太良町沖で重度の例

太良町や鹿島市、白石町沖の有明海で、養殖ノリの「色落ち」被害が拡大していることが二十八日、県有明水産振興センターの調査で分かった。同センターは太良町沖で、ノリが黄色く見える重い被害も確認しており、漁業者らに注意を呼び掛けている。

同センターは九日から同海域でノリの栄養分となる海中の窒素など(栄養塩)を採取するケイ藻赤潮を確認。二十六日に行った調査では、四段階の色落ち判定で太良町沖の二カ所が最も重い「レベル4」だった。

【佐賀新聞 1月27日抜粋】

養殖ノリ色落ち 太良町沖では重症も

赤潮は冷凍網の張り込み直後の9日から太良町沖で確認、広がってきた。23日にあった県有明海漁協の冷凍網ノリの初入れで全体の平均単価は17円60銭だったが、同漁協たら支所(太良町)の平均は6円72銭になるなど西部は厳しかった。

## 漁不ラギタイ

【佐賀新聞 1月18日】有明海のタイラギ漁が今季も不漁にあえいでいる。漁そのものは三季連続で解禁され、藤津郡太良町の県有明海漁協大浦支所管内からは一日平均五、六隻が出漁する。極度の不漁だった昨季こそ上回るが、採算が合うのは今月末までと漁業者の表情は厳しい。

大浦地区では最盛期の三十年前、二百隻以上出漁していた。諫早湾干拓事業と歩調を合わせるように漁獲量は減り、シーズンを通しての休漁が何年も続いたこともある。昨季の水揚げは貝柱重量で二キ。今季は多い日で一隻当たり十キを超えるものの、潮の流れが少しでも速くなれば三、四しか採れなくなる。

大浦地区では漁業では食べていけない、港湾工事や瀬戸内海の潜水漁に出稼ぎする人が多い。だが、不況のあおりで港湾工事が減り、賃金も抑えられているという。タイラギ不漁など漁業被害は諫

早湾干拓事業に起因するとして、有明海訴訟団が国に開門を求めている。太良町からも多くの漁業者が原告に加わっているが、裁判の長期化に伴い、裁判から離れ、廃業する人が少なくない。

昨年十一月、長崎の水産総合研究センター西海区水産研究所が、タイラギの養殖技術を開発した。種苗の確保や量産化、採算性など課題が多く、実用化を疑問視する声もある。その一方で、このままでは有明海からタイラギ漁が消えていくとの危機感も強い。「豊かな有明海を取り戻し、タイラギ漁で再び食っていくようにしなければ」。漁業者の切なる願いを受け止めながら、現実問題として裁判の行方と有明海でタイラギ養殖がうまくいくのか、追っていききたい。

■タイラギ漁 昨季は解禁から2日間だけ操業し、水揚げは貝柱重量でわずか2キ。今季の県有明水産振興センターの調査では、推定生息数は135万個。推定生産量から算出した貝柱重量は3.5ト。最も多く生息している福岡県大牟田市沖の地点で、7、8割が立ち枯れ斃死(へいし)していた。

## 韓国の子ども達

### 諫早・有明海視察



漁業者の説明に熱心にメモをとる韓国の子ども達(諫早干拓地において)

昨年、有明弁護団とともに韓国水環境賞(韓国環境府等主催)を受賞した干潟再生に取り組む韓国の子ども達が来日した。

【読売新聞 1月17日抜粋】

韓国の子どもも環境学習、漁業者から有明海の現状聞く

韓国で環境保護に取り組んでいる子どもたち14人が来日し、14日、太良町の大浦公民館で地元漁業者から有明海の現状を聞いた。

漁業者から二枚貝「タイラギ」がとれなくなった、長引く不漁のせいで離婚をしたり、自殺したり、借金を抱えたりする漁業者が増えたとの説明を受けた子どもたちは、「諫早湾を守るために活動している子どもたちはいるか」「干潟がなくなり、魚の産卵場所がなくなったとはどういうことか？」などと活発に質問した。